



〔自伝小説〕

# わが道を求めて (第十四回)

父母の家庭教育

長崎 明

さしえ 竹内 秀明

台北一中受験の頃

台北市立旭尋常小学校五、六年の二年間はあっという間に過ぎた。家の前に台北高等商業学校のグラウンドがあり、そこでよく遊んだ。四百メートルのトラックを駆け回ったり、砂場で幅跳びや三段跳びの練習をしたり、鉄棒にぶらさがって逆上りや足掛け前回り・うしろ回りを何回も繰り返し返した。懸垂での腕屈伸は十六回ほど出来た。腕立て屈伸なら三十回くらいは平気だった。グラウンドの隅のテニスコートで、弟を相手に三角ベースのゴロベーをするのが楽しみだった。

その反対側の隅には狭窄射撃場があった。自転車を買って買ったのが嬉しくて、射撃場の斜面を自転車にまたがって、滑ったり転がったりおこちたり、擦り傷だらけになりながら、とうとう独りで自転車に乗れるようになった。

その高商の横に二、三ヘクタールくらいの沼があった、夕方になるとオニヤンマ、ギンヤンマなどが飛び交っていた。バッタを捕まえ、スキの葉芯の先に縛り付けて、しばらく振り回していると、面白いようにトンボが飛び付いてきたものだった。

私の家からグラウンドの出入り口まで二百メートルほどを遠回りするのがおっくうで、家のすぐ前の垣根（盛り土に生け垣と有刺鉄線）に秘密の穴をあけて潜り込む悪戯もやった。

今考えてみると、食べ盛りの子ども四人を抱えて、父の月給では台所が火の車だったに違いない。大根や葉っぱを干したのを入れたご飯をしばしば食べさせられて、やせ細ってはいたが、思いつきり跳び回ったので、その頃に基礎体力が付いたのかもしれない。

旭小学校では六年生の夏休み、中学校への受験準備のための特別学習会を実施していた。両親は何とか私をエリートに育てあげようとして、かなりの特別負担（講師の先生への謝礼など）を覚悟のうえで、その特



台北植物園で（1936年、父撮影）



台北一中合格記念

別学習会に応募させた。一学期の成績で百人中二十番以内程度でないと受講資格がなかったが、私はすれすれでクリヤーできた。これも日頃の五十嵐先生と父の特訓のおかげであった。この程度の生徒を集めて特別学習し、台北第一中学校に何とか合格させようということであった。当時、旭小學校は台北一中に最も多くの合格者を送り込んでいた名門校であった。その台北一中はまた台北高等學校に最も多くの合格者を送り出していた。

台北一中受験の日、両親は私の弟妹を引き連れて、まさに一家総出で私の付き添いに来てくれた。筆記試

験だけでなく、口頭試問と身体検査があった。口頭試問のために前の晩に予想問答集をつくって何回か練習させられた。身体検査のときは、顔色が悪いといって何度も顔をこすられたり、体重を増やすために水をコップに何杯か飲まされたりの大騒ぎであった。試験場から出てくると「どうだった、どうだった」と、そのつど、しつこく聞かれていささかうんざりしたが、両親の願いが通じたのか、どうやら合格できた。

それもわりと上位の成績だったらしい。というのは中学一年の一学期末、初めての通信簿を渡される時、クラス担任の米増先生から「君はもっと出来の良い子かと思っていたのに、この成績では案外だ。夏休みにうんと頑張るんだね」と申し渡された。恐る恐る開けてみると二百人中九十番くらいだった。

### 私にとって台北一中とは

私は台北一中に昭和十一年四月から十五年四月台北高等學校に進学するまでの四年間お世話になった。台北一中の前身は明治三十一年創設された台湾總督府立國語學校第四付属學校尋常中等科で、その後台湾總督府立中等學校などを経て、大正十一年台北州立台北第一中等學校となった。終戦の翌年の昭和二十一年に閉校し

だが、校舎はそのまま台湾政府の建国高級中学に引き継がれた。

私にとって台北一中とは何だったのか。その気持ちを一九八八年十月、同窓会「珊瑚紫会」の機関誌に次のように投稿した。

一九四〇年三月、四年修了で母校とお別れして以来、早くも半世紀になろうとしています。同窓の皆さんとはすっかりご無沙汰に打ち過ぎ申し訳ありません。台北一中の頃、私は身体が小さく健康な方ではなかったで、とかく友達づきあいにも欠けていました。また、卒業証書も頂けませんでした。多分それで私のことを覚えていて下さる方が少ないのではないかと想像しています。

終戦直後の九月に大学を卒業して以後は幸い健康に恵まれ、この十月で満六十五才になります。病気がちだった台湾時代のわりには、よく長生きしたものです。大学教師を三十年余り続けて来ましたが、来年三月で定年退官になります。子ども三人、孫五人いますが、御多分に漏れず、例によって核家族化で、妻と二人きりの暮らしです。

過日、ふと台北市の地図を購入しましたところ、台北一中付近も、私が住んでいた東門町の辺りも、

道路はほとんど変わっていないようで、懐かしくなつて、しばらく眺めていました。

同年代の皆さんがよく台湾を訪れていらっしゃるようですが、どういうわけか、私は余り行きたいとは思いません。子どもの頃の思い出をそっと置きたいという潜在意識かも知れません。それが、失われた故郷に対する感慨と重なり合つて、訪ねることのうとましさを、やるせなさを感じるのをどうすることも出来ません。

旭小学校も、台北一中も、台北高校も、私の暮らした家も、すべてを思い出の彼方にそっと仕舞い込んで置きたい。同窓会に出ると、昔語りに台湾の話をするようになるでしょう。それが私には耐えられないように思えるのです。

それに、生来の出無精であまり旅行や宴会を好みませんので、今後とも同窓会を失礼させて頂くことになると思いますが、あしからずお許しをお願い申し上げます。

献身的に同窓会のお世話を続けて下さっている皆さんに、心から御礼やらお詫びやらを申し上げ、ご無沙汰のご挨拶と致します。

なお、台北一中の同窓会にはどういうわけか、この

冊業会のほかに麗正会というのがあって、二つの同窓会が仲良くそれぞれの活動を続けている。どちらからも案内が来るので煩わしいのも、同窓会から疎遠になっている理由の一つである。

しかし、これらの同窓会は学閥を作っているわけではない。終戦後の混乱の中で、お互いの連絡もとれぬまま、どちらも会員が増えてしまっただけで、気が付いたときは統合しにくくなっただけのことである。どこかの県の「学閥」とは訳が違うことを、両同窓会の名替のため敢えて付言して置く。

それにしても、とかく同窓会というものは、会合を持つと「長幼の序あり」が避けられない。それが高じると益暮れの付け届けが一般化して、「学閥」が物を言うようになるが、台北一中の同窓会はそのような「学閥」と全く趣きを異にしているのは確かである。私にとって母校とは、ただ心の中に生き続けているものということか。

## 台北一中の恩師

旭小学校ではクラス担任の五十嵐先生以外に顔を合わせる先生は殆どいなかったが、それでも「トンガラシ」のニックネームを差し上げていた。まして、いた

ずら盛りの中学生のこと、台北一中ではニックネームしか知らない先生も多かった。

ニックネームの付け方は比較的単純で、①風貌や所作に由来するもの、②お名前をもじったもの、③言葉のなまり・癖によるものなどに類型化できるようである。しかし、それが何十年も受け継がれてゆくには、正に言い得て妙というものがなければならぬ。

第一類型の傑作中の傑作は「カタパン」。これは教練・体操の瀬古喜三郎先生。なにしろ真っ黒に日焼けして、夜間演習のとき、どこにいても分らない。朝礼のとき、壇上から号令をかけると、広い校庭一杯に響きわたるほど声の大きい軍曹殿だった。体操の整列で「気を付け」の姿勢をとっている私の前で、ジロリと一べつするや、「お前の脚は机の足のようだ」といわれたのが今でも忘れられない。それ以来、私は自分がオー脚なのを意識して、矯正しようと努力したが、これは親ゆずりでどうにもならない。

「ヤギさん」は八木先生ではなくて、山羊ひげをはやした数学の藤下理周先生。「バックオール」は図画の塩月桃甫先生。塩月先生は髪の毛が薄く、いつも後頭部の毛を前の方になでつけていた。お顔にシミがいっぱいで「ガンモドキ」というニックネームの先生がおられたが、本名も担当科目も忘失してしまった。申し

訳なし。

第二類型の、お名前に由来するニックネームの傑作は「サスケ」こと新沼佐助先生。昭和六十年十二月某日、サンケイ新聞の特集「旧制中学名物教師」の筆頭に上げられた。同紙によると「生徒とともに泣き、生徒とともに喜ぶ人情家で、戦争が始まると、台北駅から出征する教え子をじっと見守る姿が見られた」という。猿飛佐助のように小柄で敏捷な大尉殿だった。また、お顔がお猿さんそっくりで、別名「サル」とも呼ばれた。教練や朝礼の時間には厳格そのもので、どんなに大勢の中でもうっかり私語をすると、どこからでも飛んできて一喝。生徒たちを震え上がらせた。

井島六助先生は「ロクスケ」と呼ばれた国語の先生で、特に文語体の文法に厳しかった。予習、復習にも極めて厳格で、教科書を読み間違えると「ジビキー」といって、教務員室まで備え付けの国語辞典を引きに行かされた。また、いつも黒板拭き叩きの竹の笞を持っていて、愛のムチよろしく、生徒の頭のとっぺんを叩いた。脳天に響いて涙が止まらぬほど痛かった。私が多少なりと文章が書けるのは、この先生のおかげと思っている。博物の先生で赤嶺日高先生は「アカムケ」と呼ばれたが、あまり品のよいニックネームではなかった。私たちがご遠慮申し上げてあまり使わなかつ

た。

第三類型の「エッポさん」こと、金井真六先生は教練、体操、音楽を担当する予備役の中尉殿だが、「一歩前へ」が「エッポ、マイヘ」と聞こえることから、このニックネームがついた。かなりお年を召しておられたので、跳び箱などはご自分で模範演技をなさらないで、口と手まねで教えて下さった。温厚・実直な先生なので、この先生の教練と体操の時間はみんな暗れぱれとしていた。音楽は習ったかどうか記憶にない。

中学二年のある日、このエッポさんから私に呼出しがあった。先生に呼び出されるのは余程のことなのだ。が、いくら考えても理由が思い付かない。まして、教練の先生なので殊更にかしこまって教官室を訪ねた。

ドアの外で不動の姿勢をとって

「長崎明、参りました」

「よし、入れ」

「はい、長崎明、入ります」

正面に「サスケ」、その左右に「エッポさん」と「カタパン」が控えている。エッポさんはちょうど教練の授業が終わったばかりのようで、汗を拭き拭き、

「まあ、こっちへ来たまい」

「はい、参ります」

「そう固くならなくてええよ。ところで君は新潟県

が本籍だったね」

「はい、そうであります」

「新潟のどこかね」

「新潟県中蒲原郡村松町であります」

「おお、そうか。それで、君は村松に行ったことがあるかね」

「三歳のとき両親に連れられて渡台して以来、一度も帰ったことはありません」

「そうか、それは残念だ。実は、俺も新潟なので最近の話が聞きたくて来て貰ったのだが、それでは仕様がないな。よし、かいりたまいな」

「はい、長崎明、帰ります」

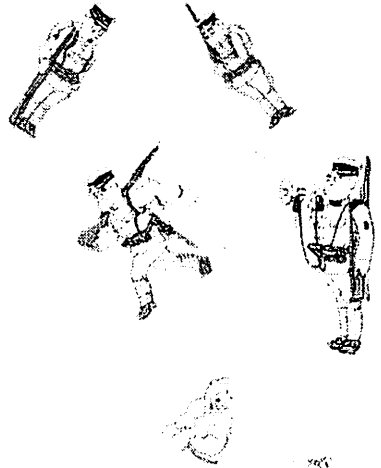
汗びっしょりの一時であったが、何のことはない。エッポさんの話し相手に呼ばれただけであった。ほっとすると同時に、そうか、エッポさんも新潟出身なので、「一歩前へ」が「エッポ、マイエ」になるのだと知った。うちの母も「色鉛筆」がどうしても「エロインピツ」になって、何回も父に直されていたっけ。故郷を離れて暮らす老將校としてのエッポさんの知られざる一面に触れた思いがして、エッポさんが好きになった。エッポさんが新潟県のどこ出身かは、問い返すだけの余裕がなかったので、いまだに分からない。心あたりの方は教えて頂きたい。

## 軍人勅諭

私の中学生生活の四年間は、二、二六事件・日独防共協定調印（一九三六年）、日華事変（蘆溝橋事変）勃発・文部省「国体の本義」制定（三七年）、国家総動員法成立・武漢三鎮占領（三八年）、ノモンハン事件勃発・ドイツ軍ポーランド侵入・第二次世界大戦勃発（三九年）、日独伊三国軍事同盟条約調印・大政翼賛会創立・紀元二千六百年式典挙行・せい沢品禁止令公布・東京オリンピック中止（四〇年）と続き、翌四一年には遂に太平洋戦争へと突入したのであった。

台北一中での軍事訓練は年ごとに厳しさを加えた。三年生になると教練の時間が増え、三八式歩兵銃を肩に、ゴボウ剣を腰に、弾薬盒（ごう）を腹に、ゲートル巻き、編み上げ靴姿で、軍歌を歌いながら校庭を分列行進させられた。歩兵銃の分解掃除もやらされた。三月十日の陸軍記念日には台湾総督府前で挙行される閲兵式にも引っぱり出された。

雨天で野外訓練のできない日には、教室で軍人勅諭の学習をさせられた。



一、軍人は忠節を尽すを本分とすべし。

一、軍人は礼儀を正くすべし。

一、軍人は武勇を尚ぶべし。

一、軍人は信義を重んずべし。

一、軍人は質素を旨とすべし。

この軍人勅諭は一八八二年に發布され、軍人訓誡ばかりでなく、広く国民強化の武器とされ、天皇への忠誠心を植え付けるのに大きな役割を果たした。中学ではこの五か条だけだが、台北高校では全文を暗記・暗誦させられた。

私は例によって暗記が苦手なので、先ず五か条を「忠・礼・武・信・質」とし、それぞれに「本分・正・尚・重・旨」を付けて、やっと覚えた。本文は「我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にぞある」で始まる

長文で、とても覚え切れるものではなかったが、当時の私に皇國に生を受けた喜びを感じさせるには十分であった。

「國体の本義」が出たときは、自らいちはやく書店で買い求めて読みふけり、天皇陛下を中心とする大東亜共栄圏繁栄のために、南の國・台湾で学ぶことの有難さに一人ひそかに歓喜するほどの軍國少年に変わっていた。国語の時間に「愛読書を挙げよ」といわれて「國体の本義」と答え、先生の目を白黒させるほどであった。

台北一中の校歌も大好きであった。特にその一番は気宇壮大で、感ここにきわまった。いわく、  
台北一中校歌

#### 台北一中校歌

- 一、浩海<sup>浩海</sup>万里<sup>万里</sup>大瀛<sup>大瀛</sup>の  
 濃緑<sup>濃緑</sup>切<sup>切</sup>ふ常夏<sup>常夏</sup>の  
 日本<sup>日本</sup>の南<sup>南</sup>の南<sup>南</sup>の  
 照らぬくまなき大君<sup>大君</sup>の  
 扶<sup>扶</sup>挿<sup>挿</sup>に打<sup>打</sup>たん大國<sup>大國</sup>の  
 進取<sup>進取</sup>の意<sup>意</sup>氣<sup>氣</sup>に生<sup>生</sup>くるなる
- 碧瀾<sup>碧瀾</sup>高く打<sup>打</sup>つ廻<sup>廻</sup>  
 我が高砂<sup>高砂</sup>は大八洲<sup>大八洲</sup>  
 重<sup>重</sup>き鎮<sup>鎮</sup>と立<sup>立</sup>てるかな  
 恵<sup>恵</sup>の光<sup>光</sup>身に受<sup>受</sup>けて  
 因<sup>因</sup>南<sup>南</sup>の翼<sup>翼</sup>飛<sup>飛</sup>へつ、  
 健<sup>健</sup>鬼<sup>鬼</sup>の醉<sup>醉</sup>を君<sup>君</sup>見<sup>見</sup>すや、



三、天そり立つ新高の

大空涵すわたつみの

向上息ます境まさる

四、あ、校風の樹ふ時

自覚の光世に布けば

我れ日東の大男児

嵩き理想をうち仰ぎ

深き智徳を湛へては

無限の力が我にあり

そこに我等の自覚あり

国に不断の榮あらん

使命尊き前途かな

台北一中では登下校時、上級生に出会ったら、必ず挙手の敬礼をしなければならなかった。見付け損なつて敬礼しなかった場合でも、言い訳は許されず、鉄拳制裁を受けた者もいた。下級生は道路を歩くにも前後左右に目を配らざるを得なかった。

登校時、道路の向こう側を必ず擦れ違ふ女性がいた。毎朝ほとんど同じ場所でお出会う彼女の存在に、いつころから気が付いたのだろうか。それは日課のようにいつこらいて、見かけない日には気掛かりになった。二十才過ぎのOLだったに違いない。ひよっと声をかけてみようと思つたこともあつたが、やっとニキビの出できた軍国少年に、とても出来るものではなかつた。

当時、中学四年になると、陸軍士官学校、海軍兵学校、陸軍経理学校、高等学校(旧制)の試験が受けられた。私は台北高等学校受験しか考えていなかったのだが、先生の奨めもあつて陸軍経理学校を受けることになった。父の賛成も得た。その方が早くお国の役に

立つという「軍国の父」的な考えではなく、高校受験のための度胸だめし程度だったのだろう。

陸海軍関係の学校は身体検査が先で、それに合格しなければ学科試験が受けられなかった。身体検査はパンツではなく裨をしなければならぬので、前の晩に母が一生懸命に縫ってくれた。初めての裨をしめてみて、いかに自分の体格がみすばらしいかを思い知らされた。試験場では身長・体重・手足の運動機能・肺活量・小便・内臓・肛門・性器に至るまで徹底的に検査される。私は先ず肺活量で引っぱかった。たつた千六百しかない。検査官が「もっと吹け、もっと吹け」と励ましてくれるのだが、どうしてもそれ以上には上がらない。次は内臓。何しろ小便が真っ赤なのに検査官もびっくり。何か重い病気をしたことがあるかと聞かれたが、自分で特に思い当たることもない。緊張のあまりだったのか。とうとう後回しにされて、全員が終わつてから再び検査されたが、やっぱり不合格を言い渡された。

どんな試験でも不合格は嫌なものである。しぶしぶ首尾を報告すると、父は「氣を落とさず、高校めざして頑張れ」と一言。多分、ほっとしていたのではなからうか。(ながさき あきらⅡにいがた県民教育研究所理事長)